

北海道・札幌2030オリンピック・パラリンピックプロモーション委員会

「私たちがほしい世界」とスポーツ： 学生による東京2020大会持続可能性評価

2022年7月26日

慶應義塾大学 蟹江研究室

佐々木剛二（SFC研究所 上席所員）

早川さくら（環境情報学部4年）

蛇谷幸紀（環境情報学部4年）

発表者



佐々木剛二
慶應義塾大学
SFC研究所 上席所員



早川さくら
環境情報学部4年



蛇谷幸紀
環境情報学部4年

慶應義塾大学SFC 蟹江研究室におけるSDGs研究

SDGsの実現のための 多様な研究・教育・産学連携プログラム

- ・ 蟹江憲史教授をはじめ、若手SDGs研究者たちと、慶應義塾大学で学ぶZ世代の学生が企業や自治体と協業。
- ・ 地方創生、食品、衣料、航空、鉄道、金融、メディア、スポーツなど多彩な分野でSDGsを用いた評価やまちづくりを支援。



慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス (SFC)

「未来からの留学生」

- ・ 持続可能な世界をつくるため、未来から大学に学びに来ている学生。
- ・ 実現すべき将来の社会のあり方からバックキャストされた、問題解決の道筋を示す。

OGI調査から学生による持続可能性評価プロジェクトへ

1. OGI (Olympic Games Impact) 調査 (2015-17)

- ・オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が生じる有形・無形の影響についての理解を深め、その経過と進化を客観的な方法論に基づいて追跡するための調査。
- ・2015年から慶應義塾大学（拠点：蟹江研究室）が、リサーチ・パートナーとして組織委員会から受託。
- ・国際オリンピック委員会（IOC）が定めるガイドラインにもとづき、独立・中立の第三者による評価。
- ・東京大会では「環境」9課題25項目、「社会文化」12課題36項目、「経済」10課題29項目（計31課題90項目）を設定し、報告書を作成。大会後まで計12年間の定期的報告の予定であった。 Source: 組織委員会, 2016. 『持続可能性に配慮した運営計画』
- ・しかし、ベースライン報告書の発表を目前に2017年に急遽中止。

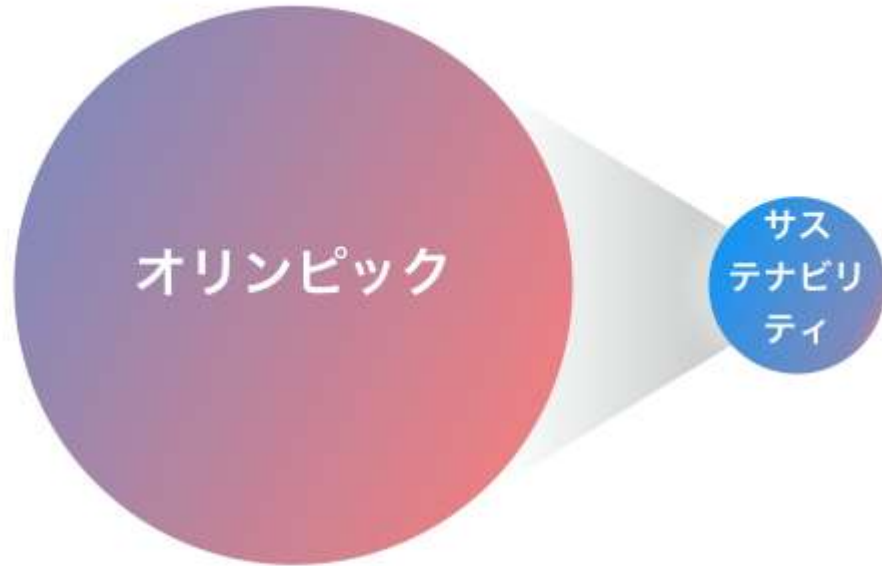


2. 学生による持続可能性評価（朝日新聞社との協業 2020-22）（2017-22）

- ・東京大会OGI調査で行った分析をもとに、学生主体の調査・分析。
- ・蟹江研究室が中心となり、小熊祐子（准教授）研究室、塩田琴美（准教授）研究室も共同で研究。
- ・大会パートナー企業のサステナビリティ関係者、UNICEF、障害者スポーツ関係者をはじめとするゲストスピーカーとの対話。
- ・自治体、大会パートナー企業、研究機関、地域ビジネスアクターなどにインタビュー。

東京大会とパラダイムシフト

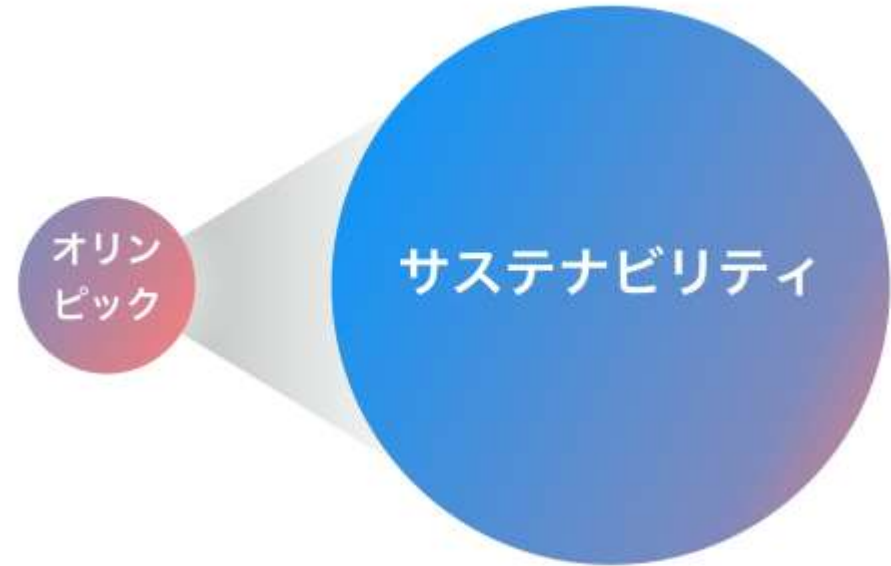
2013年
大会招致決定



経済成長のための大会
インフラのための大会
熱狂・興奮のための大会

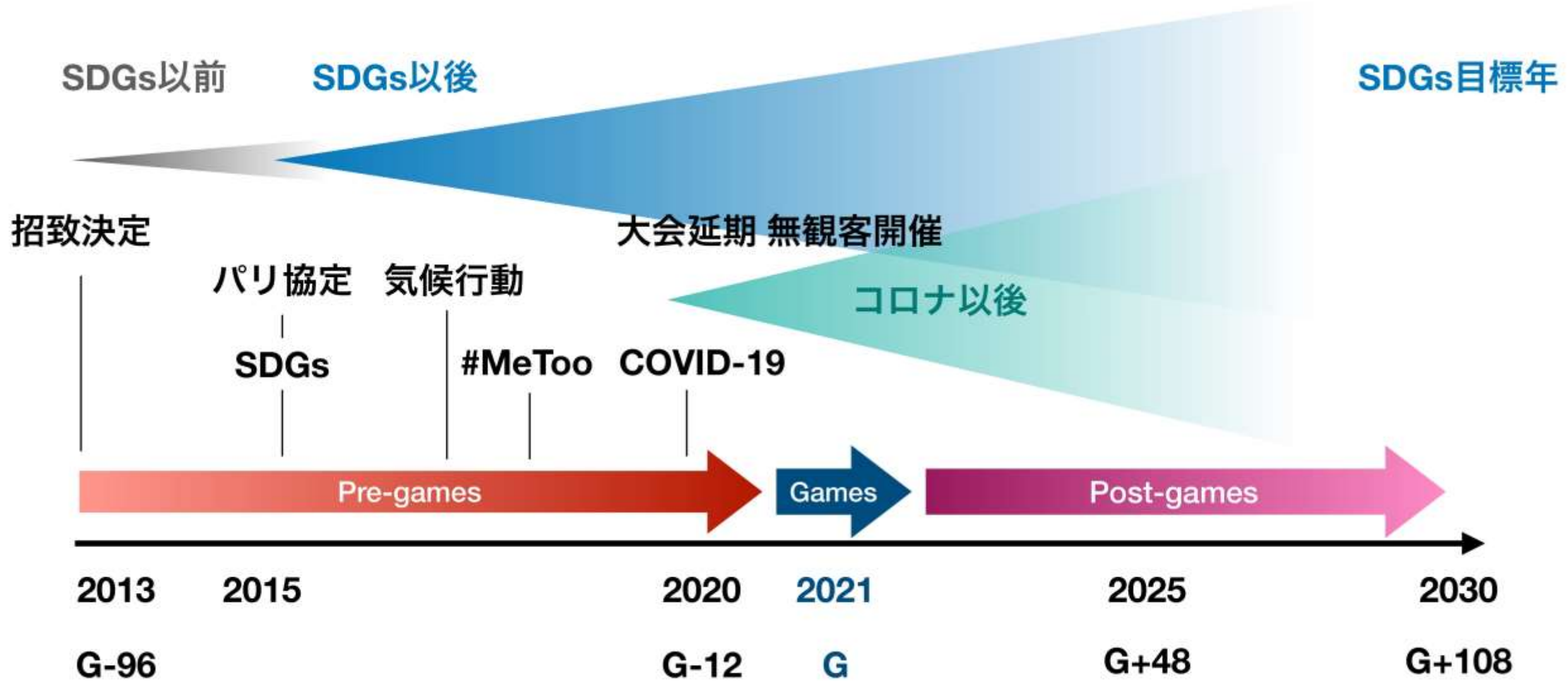


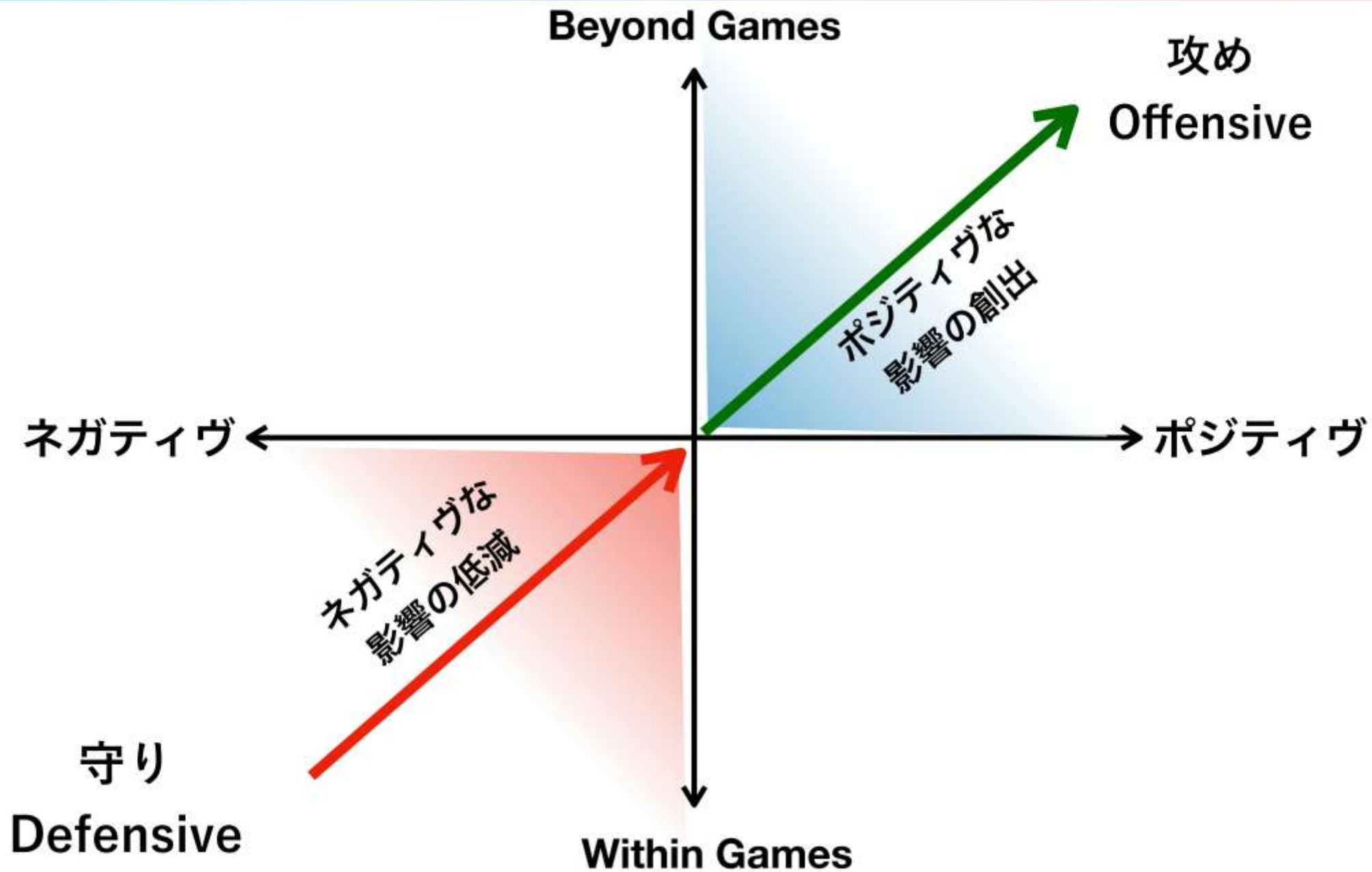
2021年
大会開催



SDGsのための大会
環境・社会のための大会
ウェルビーイングのための大会

東京大会とパラダイムシフト





大会持続可能性評価のプロセス

I. 指標分析（量的調査）

1. SDGsとの関連性において、「大会がめざすべき社会像」を定義。
2. 慶應義塾大学が起案したOGIを原型とする調査指標（2017年）をもとに、とりあげるべき調査「指標」を選定。
3. 各指標に関連する「オープン・ソース」（既存の統計や報告書）を選定し、調査遂行可能性などを調査。
4. 環境・社会・経済の分野のもとに各指標が構成される「カテゴリー」（環境5、社会7、経済8）を設定。



II. 質的調査

5. カテゴリーに関して、「質的調査」を計画。
6. インタビュー、観察、メディア報道にもとづき分析。



III. カテゴリーごとの分析

7. 大会開催によってもたらされたデータを通じて分析をブラッシュアップ。
8. カテゴリーごとの分析。



IV. 各分野の統合的分析

9. 環境、社会、経済分野について統合的分析を実施。

量的調査 vs 質的調査

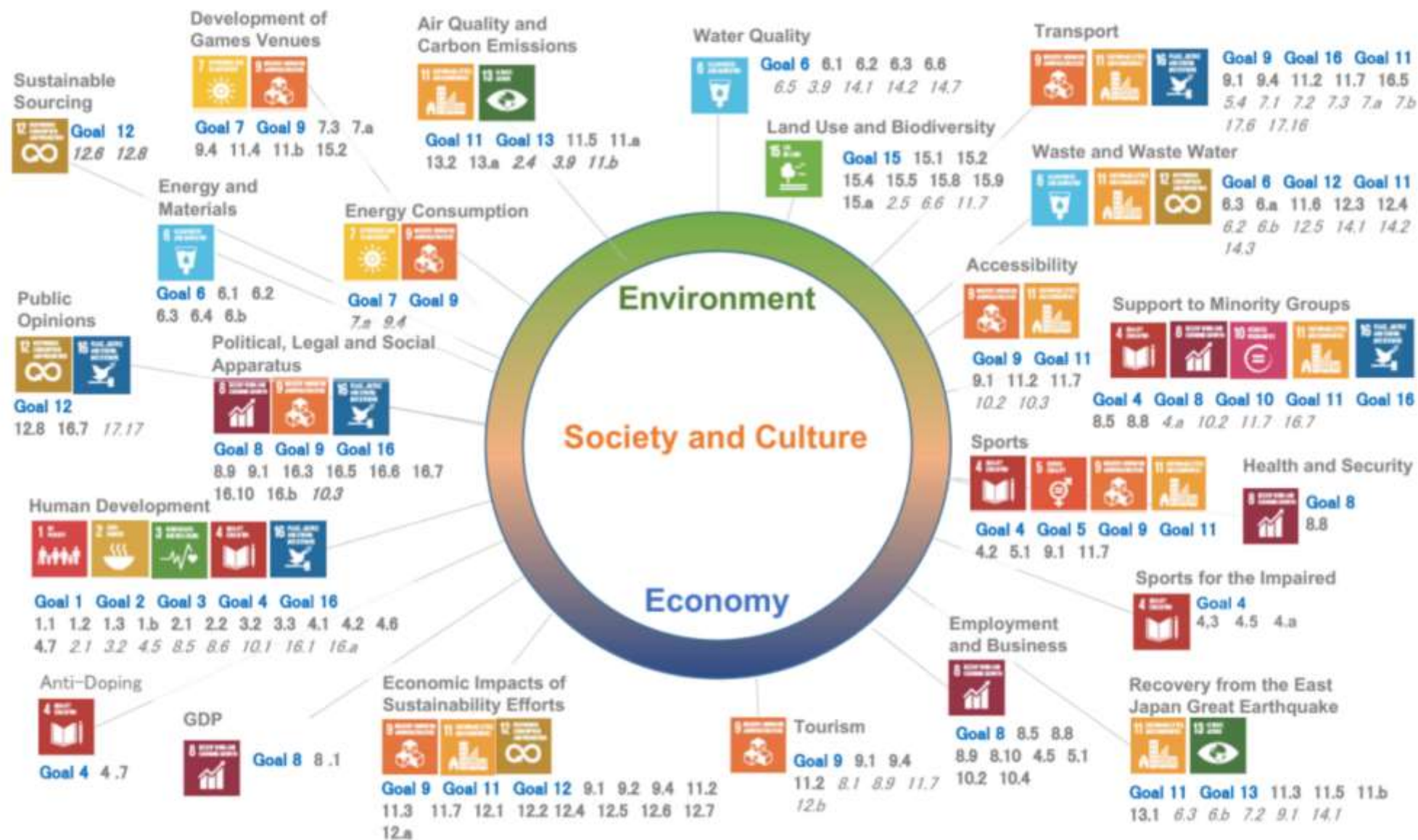
量的調査：

・オープンな数値データを時系列に追跡することにより、都市の状況や大会による変化を分析。ダッシュボード。

質的調査：

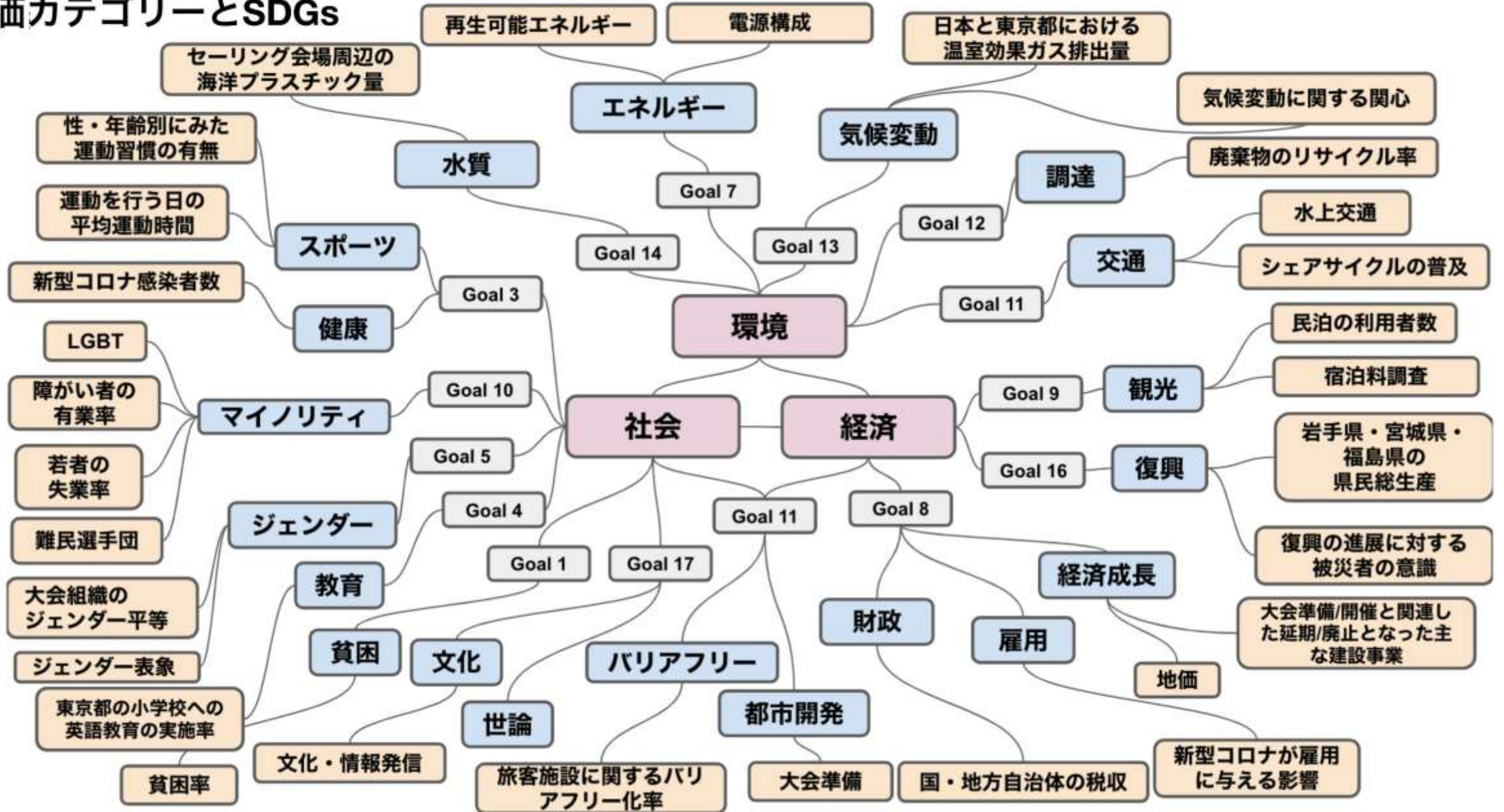
・人々の「語り」や「観察」にもとづいて、統計人々の経験や個別の視点に光を当てる。
→「誰一人取り残さない」

OGI研究における調査分野とSDGsの関係



Bold: Highly Relevant
Italic: Relevant

評価カテゴリーとSDGs



調査シート（量的・質的分析）

1. 指標分析（量的調査）のシート

I. 基礎情報

- ・ 指標
- ・ SDGs
- ・ 指標の定義

II. めざすべき社会

1. 大会以前の社会の状況
2. 大会後にめざすべき社会の状況
3. 2の実現のためにあるべき大会のすがた

III. 指標分析

1. 大会の招致コミットメント
2. 関連するレガシー&アクション・プラン項目
3. 指標
4. 分析
5. 大会後に指標がどのように変化すべきか

IV. 関連情報

1. 関連する社会的議論
2. 予期されるバイアス
3. 関連する概念、出来事、キーワード

2. 質的調査のシート

I. 課題

1. 中心調査課題
2. 調査小課題

II. 対象

1. 対象とする集団
2. 調査に協力いただいた個人
3. 対象とするフィールド（地区、地域、組織）

III. 小課題ごとの分析

1. 観察
2. インタビューにおけるナラティブ
3. 統計
4. 上記のデータに基づく分析
5. 今後の検討が望まれる課題

IV. 中心調査課題の分析



2012年ロンドン大会におけるOGI報告書

Environmental Indicators (15)

Code	Indicator Name	Event/Context
En03	Water Quality	C
En04	Greenhouse Gas Emissions	C
En05	Air Quality	C
En06	Land-Use Changes	C
En07	Protected Areas	C

Socio-Cultural Indicators (27)

Code	Indicator Name	Event/Context
En10	Public Transport	C
En11	Trans	C
En18	Solid V	C
En20	Green	C
En21	Olymp	C
En22	Olymp	C
En24	Olymp	C
En26	Capac	C
En29	Olymp	C
En33	New V	C

Economic Indicators (25)

Code	Indicator Name	Event/Context
Ec01	Employment by Economic Activity	C
Ec02	Employment Indicators	C
Ec03	Size of Companies	C
Ec06	Public Transport	C
Ec07	Accommodation Infrastructure	C
Ec08	Accommodation Occupancy Rate	C
Ec09	Tourist Nights	C
Ec10	Airport Traffic	C
Ec12	Hosting International Events	C
Ec17	Hotel Price Index	C
Ec18	Real Estate Market	C
Ec22	Foreign Direct Investment	C
Ec24	Structure of Public Spending	C
Ec26	Public Debt	C
Ec27	Jobs Created in Olympic and Context Activities	E
Ec30	Size and Quality Management of Contracted Companies	E
Ec33	Structure of OCOG Revenues	E
Ec34	Structure of OCOG Expenditure	E
Ec35	Total Operating Expenditure (Olympic activities)	E
Ec36	Total Capital Expenditure (Olympic activities)	E
Ec37	Total Capital Expenditure (context activities)	E
Ec38	Total Wages Paid (Olympic activities)	E
Ec41	Public Share of Expenditure (Olympic activities)	E
Ec42	Public Share of Expenditure (context activities)	E
Ec44	Employability of People with Disabilities	C



En21 - Olympic-Induced Land Use Changes

En24 - Olympic-Induced Housing

City (6 Host Boroughs)

Data issues

This indicator measures land use change induced by the London 2012 Games, and consequent on that, housing development. These two indicators are focused on the Olympic Park and its surrounding development area as the main site for permanent land use change directly resulting from the London 2012 Games. The data source is the London Legacy Development Corporation *Local Plan 2015 to 2031* which was adopted on the 21 July 2015.

Presentation

See Table and Map overleaf.

Analysis

The London 2012 Games provided the opportunity and blueprint for achieving the bringing back into productive use and regeneration of a "long neglected brownfield area of the city". The London 2012 Master-plan was to transform this area into "an urban green space, with lush meadows, lawns, wetlands, woodlands and wildlife habitats alongside sports venues, housing and supporting infrastructure and buildings. Disused buildings were demolished, rivers dredged, and power cables buried in new tunnels, while above ground new roads and bridges were created to link the different parts of the Olympic Park and neighbouring communities".

Post-Games long term development is now managed by the LLDC and their *Local Plan 2015 to 2031* sets out the aspiration for the completion of this new city district. It will have: a town centre adjoining the existing Stratford town centre, residential neighbourhoods (24,000 new homes, of which 35% will be affordable) and employment clusters (to include universities and museums) together with the permanent sporting venues. There is also provision for community infrastructure: schools, healthcare, nurseries, community centres, play areas and open space

New sporting facilities available for elite and public use that were London 2012 venues are: the Stadium, the Copper Box, the London Aquatics Centre, the Lee Valley Velopark, the Lee Valley Hockey and Tennis Centre, Lee Valley White Water centre.

See also indicator En06, So14

Impact

Relevance **H** Rating **G** Confidence **H**

The London 2012 Games has been a catalyst for the transformation of an under used and brownfield site not so far from the centre of London. Dissenters will say that existing communities and business were disrupted, compulsorily purchased and removed to make way for the site preparation and construction. Nevertheless, these are being replaced by many more houses and employment opportunities. A key legacy promise was to transform the heart of East London, an area that needed extensive regeneration. That is being achieved. Some debate continues though as to whether sufficient of the new homes will be affordable for local residents and that there is a sense that the target of 35% affordable homes is being steadily eroded".

2012年ロンドン大会OGI調査における環境、社会・文化、経済指標のリスト

2012年ロンドン大会OGI調査における「オリンピックによってもたらされた土地利用の変化」「オリンピックによってもたらされた住宅」指標の分析

Source : University of East London. 2015. Olympic Games Impact Study: London 2012 Post-games Report.

学生主体による調査分析シート

I. 基礎情報

カテゴリー：水質	指標番号：En01
指標： 1. お台場海浜公園の水質 2. 皇居外苑のお濠の水質	
担当者名：蛇谷幸紀	バージョン：1
SDGs ゴール：6 14	ターゲット：6.2 6.3 6.b 14.1 14.2
指標の定義： 1. お台場海浜公園の大腸菌群数の推移 2. 皇居外苑のお濠のリンや窒素等の推移	

II. めざすべき社会像

1. 大会以前の社会の状況： ・お台場海浜公園においては、雨天ののちに水質が悪化することが指摘されてきた。また、皇居外苑の水質は清浄ではなく、皇居の景観に悪影響を与えていた。
2. 大会後にめざすべき社会の状況： ・オリンピックをきっかけとして会場や周辺地域の水環境が改善されることが望ましい。特に、マイクロプラスチックの流出や水質汚染の状況が改善されるよう、大会後でも問題意識を継続させることを目指す。
3. 上記2の実現のためにあるべき大会のあり方： ・海洋プラスチック問題や大腸菌群数の過多、その他の水質問題に関して、科学的なデータに基づき対策を講じることにより、都市における水環境の改善のモデル・ケースとすることが必要である。

3. 指標：

1. お台場海浜公園の水質

資料：お台場海浜公園水質調査結果（港区。各年度の大腸菌群数が最高値のデータを参照。）

調査年度	H26.7月22日	H27.6月25日	H28.1月20日	H29.5月16日	H30.5月13日	R1.7月9日	R2.9月29日	基準値
A地点:お台場海浜公園水質	1100	1400	1400	580	1800	370	240	1000個/100ml以下
B地点:都営台場一丁目アパート1号棟前水質	1200	2800	2600	1300	1600	460	640	1000個/100ml以下
C地点:区立台場保育園前水質	1700	2600	3800	1000	1000	520	600	1000個/100ml以下

その他の数値（A地点のみ）
 pH
 COD
 溶解性有機物
 透明度

最新データ発表年月：不明
 次回データ発表年月：未定
 出典：港区「お台場」
<https://www.city.minat>

2. 皇居外苑のお濠の水質

資料：千代田区の環境 ―水質汚濁 資料― 皇居外苑の日比谷濠の調査資料

項目	日比谷濠														
	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	
透明度 (cm)	39	44	43	38	45	25	31	30	27	46	27	38	37	45	38
pH	8.8	8.0	8.8	8.0	8.8	8.8	8.8	8.8	8.8	8.8	8.8	8.7	8.3	8.8	8.8
DO (mg/L)	19.4	19.3	19.8	19.2	19.3	19.8	19.8	19.8	19.8	19.8	19.8	19.8	19.8	19.8	19.8
BOD (mg/L)	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8
COD (mg/L)	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
TN (mg/L)	19	11	12	11	19	11									
窒素濃度 (mg/L)	1.80	0.82	1.11	1.02	1.91	1.48									
リン濃度 (mg/L)	0.07	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08									
塩化物イオン (mg/L)	17	18	18	18	18	18									
アンモニア態窒素 (mg/L)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00									
硝酸態窒素 (mg/L)	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08									
硫酸態窒素 (mg/L)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00									
大腸菌群数 (MPN/100ml)	29	40	12	34	48	170									

最新データ発表年月：不明
 次回データ発表年月：未定
 出典：千代田区「令和元年度版 水質汚濁資料」
<https://www.city.chiyoda.lg.jp/documents/6995/r1s>

4. 分析（指標から明らかになること）：

・雨や台風などの天候により大腸菌群数は大きく変動するが、年々数値が良くなっている傾向にある。雨天時において、H26年度では基準値を超えていたが、R1、R2年度では雨天時でも基準値を超える数値は見られなかった。大腸菌群数以外の数値も元からあまり基準値は超えていなかったが、数値は良くなっている傾向にある。
 しかし、H30年度では数値が基準値の10倍超えている時があり、なぜこのような数値が出たのか、どんな背景があったのかが分からない。もし、現在でも同じ状況になった時にどれほどの数値が出るのだろうか。

・天候によって左右されるが、皇居のお濠、特に日比谷濠において、アオコの原因である窒素、リンに着目すると年々数値が良くなっている傾向にある。また、その他の数値も良くなっている傾向にある。アオコの大量発生が無くなったり、生態系が変わった瀬もあるなどの結果が出たので目標達成したと言える。しかし、メディアや区からの情報のアップデートがほとんどなく、皇居のお濠に対し世間の関心が薄いのではないかと考えられる。

大会後の考察：東京都の発表では、オリパラのトライアスロン、オープンウォーター共に基準値内の数値であり、問題なく競技が行われたとのこと（数値の発表はなし）。女子トライアスロンでは台風8号の影響があり、悪天候の中の試みとなったが問題なく取り組めたのは対策の賜物だろう。ただ、水の色が茶色で視界が悪かったのは見ていて不愉快だった。東京新聞の記事による雨出選手へのインタビューでは、においについて「テスト大会に比べれば、全然臭いならなかった」と話し、トライアスロンや海外の選手からも目立った不満は聞かれなかった。（<https://www.tokyo-np.co.jp/article/122202>）
 また、8/27日に予定されていたパラリンピックトライアスロンの試泳が同日午前の調査で大腸菌群数の基準値を超えたため中止となった。（https://www.city.chiyoda.lg.jp/news/20210827_01）

環境 En01 「水質」 カテゴリーの指標分析シート

環境：「水質」カテゴリー

1. 指標分析「東京・お台場海浜公園の水質変化」

- ・オープン・ウォーター、トライアスロン会場は、大腸菌による水質汚染の懸念。
 - ・3重スクリーンや砂の投下により、大会当日は基準値をクリアした。
- ▶ しかし、海浜公園の3重スクリーンの設置は一時的な措置であり、持続的な水質改善につながっていない可能性がある。

2. 質的調査「千葉・釣ヶ崎海岸サーフィンビーチの水質変化」

- ・サーフィン会場の一宮町役場にインタビュー・現地フィールド観察を行った。
 - ・会場担当者によると、水質上の直接的影響はほぼなかった。
- ▶ しかし、大会を契機に、地域住民やサーファーたちが、小学校での啓蒙活動や「ビーチ・クリーン」（海岸清掃）に参加。市民の自主的参加で環境が改善。



清掃された釣ヶ崎海岸サーフィンビーチ

3. 結論：その場限りでなく、持続的な環境改善のしくみを

- ・大会の「環境」施策は、一時的・限定的な対策にとどまっていて、「レガシー」につながっていないのでは。
- ・環境配慮の見せかけや、大会開催時のためだけの解決ではなく、持続的な環境改善のしくみをつくってほしい。
- ・課題の根本的解決を図り、後世に残していくことが大切。

主なカテゴリーにおける学生の分析

	主なカテゴリー	分析
環境	En03 エネルギー	大会期間中の再生可能エネルギー使用率は100%、大会が排出する二酸化炭素はゼロで、カーボン・ニュートラルリティを実現。ただし、実際には排出量の買取りが大きな割合を占めた。
	En05 リサイクル	メダル、聖火トーチ、選手村の段ボールベッド、リサイクル・ボトルの導入などシンボリックな試みが推進された一方、フードロスの削減などについては、課題も残った。
社会	Sc01 スポーツ	大会開催によるスポーツ実施率への影響は、今後のさらなる調査・分析が必要（小熊研）。障害者スポーツに対する認知は高まったが、障害者に対する知識の増進が課題。
	Sc03 マイノリティ	大会においては、自らがLGBTQであることを公表する選手の数が増加。メディアにおいても認知が広がった。D&Iにかかわるハンドブックが示された。ただし、当事者は、日本における性的多様性に関する認識の後進性を指摘。
	Sc04 ジェンダー	森前会長による発言が社会的に大きなインパクトをもって受け止められた。JOCの理事の女性比率に改革。公平でインクルーシブな報道のためのガイドラインなどが定められた。
	Sc05 教育	多くの学校で、障害者理解のための教育プログラムを実施し、教育的インパクトは大きかった。単発に終わらない、継続的サポートが必要。
経済	Ec01 観光	コロナウイルスの影響、大会の延期、および無観客開催により、国内外からの宿泊客はほぼ停止。ただし、感染症影響のもとで事業継続の困難を抱える事業者も。
	Ec02 交通	大会車両における水素燃料車の導入（475台）、水素バスの導入などに進展。また、大会期間中の「ロードプライシング」も効果があったと主催者は報告している。
	Ec04 都市開発	大会の開催決定後、東京の都心部では大規模な都市開発が進展。有明、豊洲、虎ノ門エリアなどにおける複合開発、大会関連の競技場開発、周辺駅の刷新・バリアフリー化などが推進。ただし、多くの新設競技施設は、維持費をまかなうことができないことが指摘されている。

主なカテゴリーにおける学生の分析

	主なカテゴリー	分析
環境	En03 エネルギー	大会期間中の再生可能エネルギー使用率は100%、大会が排出する二酸化炭素はゼロで、カーボン・ニュートラルリティを実現。ただし、埼玉県からの排出量の買取りが大きな割合を占めた。
	En05 リサイクル	メダル、選手村の段ボールベッド、リサイクル・ボトルの導入などシンボリックな試みが推進された一方、フードロスの削減などについては、課題も残った。
社会	Sc01 スポーツ	大会開催によるスポーツ実施率への影響は、今後のさらなる調査・分析が必要（小熊研）。障害者スポーツに対する認知は高まったが、障害者に対する知識の増進が課題（塩田研）。
	Sc03 マイノリティ	大会においては、自らがLGBTQであることを公表する選手の数が増加。メディアにおいても認知が広がった。ただし、当事者は、日本における性的多様性に関する認識の後進性を指摘。
	Sc04 ジェンダー	森前会長による発言が社会的に大きなインパクトをもって受け止められた。男女参加比率、男女混合種目、JOCの理事の女性比率などに改革。ジェンダーに関する公平でインクルーシブな報道のためのポートレイヤル・ガイドラインなどが定められた。
	Sc05 教育	多くの学校で、障害者理解のための教育プログラムを実施し、教育的インパクトは大きかった。単発に終わらない、継続的サポートが必要。
経済	Ec01 観光	コロナウイルスの影響、大会の延期、および無観客開催により、国内外からの宿泊客はほぼ停止。ただし、感染症影響のもとで事業継続の困難を抱える事業者も。
	Ec02 交通	大会車両における水素燃料車の導入（475台）、水素バスの導入などに進展。また、大会期間中の「ロードプライシング」も効果があったと主催者は報告している。
	Ec04 都市開発	大会の開催決定後、東京の都心部では大規模な都市開発が進展。有明、豊洲、虎ノ門エリアなどにおける複合開発、大会関連の競技場開発、周辺駅の刷新・バリアフリー化などが推進。ただし、多くの新設競技施設は、維持費をまかなうことができないことが指摘されている。

主なカテゴリーにおける学生の分析

	主なカテゴリー	分析
環境	En03 エネルギー	大会期間中の再生可能エネルギー使用率は100%、大会が排出する二酸化炭素はゼロで、カーボン・ニュートラルリティを実現。ただし、埼玉県からの排出量の買取りが大きな割合を占めた。
	En05 リサイクル	メダル、選手村の段ボールベッド、リサイクル・ボトルの導入などシンボリックな試みが推進された一方、フードロスの削減などについては、課題も残った。
社会	Sc01 スポーツ	大会開催によるスポーツ実施率への影響は、今後のさらなる調査・分析が必要（小熊研）。障害者スポーツに対する認知は高まったが、障害者に対する知識の増進が課題。
	Sc03 マイノリティ	大会においては、自らがLGBTQであることを公表する選手の数が増加。メディアにおいても認知が広がった。D&Iにかかわるハンドブックが示された。ただし、当事者は、日本における性的多様性に関する認識の後進性を指摘。
	Sc04 ジェンダー	森前会長による発言が社会的に大きなインパクトをもって受け止められた。JOCの理事の女性比率に改革。公平でインクルーシブな報道のためのガイドラインなどが定められた。
	Sc05 教育	多くの学校で、障害者理解のための教育プログラムを実施し、教育的インパクトは大きかった。単発に終わらない、継続的サポートが必要。
経済	Ec01 観光	コロナウイルスの影響、大会の延期、および無観客開催により、国内外からの宿泊客はほぼ停止。ただし、感染症影響のもとで事業継続の困難を抱える事業者も。
	Ec02 交通	大会車両における水素燃料車の導入（475台）、水素バスの導入、会場周辺駅のバリアフリー化などに進展。また、大会期間中の「ロードプライシング」も効果があったとの報告あり。
	Ec04 都市開発	大会の開催決定後、東京の都心部では大規模な都市開発が進展。有明、豊洲、虎ノ門エリアなどにおける複合開発、大会関連の競技場、選手村開発などが推進。ただし、多くの新設競技施設は、その運営において大幅な赤字が見込まれることが指摘されている。

朝日新聞社との共同研究

朝日新聞デジタル > 記事

TOKYO 2020 // // // トップ ニュース 競技日程 競技一覧 会場施設 日本代表 PDF号外

五輪開催に「合理的な説明欲しい」 問われた橋本会長は

有料会員記事

構成・野村周平 2021年4月30日 6時00分



東京五輪・パラリンピック大会組織委員会の橋本聖子会長（中央）と学生たち=北村玲奈撮影

出典：「朝日新聞デジタル」2021年4月30日。

SDGsの視点からオリパラを考える 東京大会を契機に何が変わるのか 朝日新聞社・慶大研究室調査

2021.08.13

URLをコピー

ツイート

Like 24

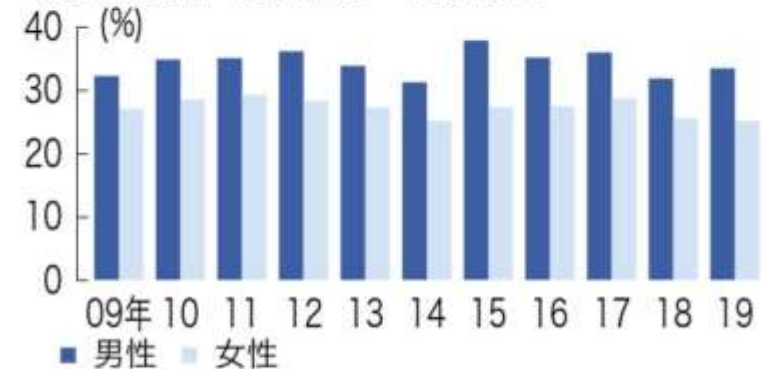
Share

81 0



運動習慣者の推移

(厚生労働省の国民健康・栄養調査)



東京オリンピック(五輪)・パラリンピックは、夏季大会で初めて、準備で国連が掲げる「SDGs」(持続可能な開発目標)を指針にしました。SDGs研究の第一人者である慶応大大学院の蟹江憲史教授の研究室などと朝日新聞は、SDGsの視点から大会が社会に与える影響について共同で調査を続けています。大会を契機に何が変わるのか。学生らと記者が問題意識を共有して調べていることの現状を一部紹介します。(朝日新聞スポーツ部・野村周平、前田大輔)

出典：「朝日新聞デジタル」2021年8月13日。

2030年に向けた社会変革

1. 未曾有の困難に出会った大会。SDGs実現の基盤としての「健康」。

- ・ 2度にわたる招致レースを経て、高い目標を掲げた開催計画と準備。
- ・ しかし、コロナウイルスの蔓延という状況のもと、1年の開催延期、無観客開催。
- ・ SDGs実現の基盤としての「健康」の重要性が改めて明らかに。

2. レガシー創出は道半ば。ジェンダーや人権をめぐる日本の課題。

- ・ 大会準備によって「環境」「社会」「経済」のそれぞれにおいて、いくつかの前進が見られた。
- ・ しかし、大会は、サステナビリティの推進にかかわる大きな運動にはつながらなかった。
- ・ 特に、ジェンダーや人権をめぐる日本の課題が浮き彫りに。

3. ポスト大会の社会変革へ。ビジョンを新たに定義し、データに基づく行動・評価を。

- ・ パラダイムの転換のもと、これまでに築かれたモーメンタムをいかにSDGs達成への道筋につなげるか。
- ・ 組織委員会が解散するなか、大会以後の社会のビジョンを改めて定義し、データに基づき評価することが重要。
- ・ 男性中心のシステムや「経済」インパクトと強く結びついたこれまでのスポーツのあり方から、さまざまなジェンダーや身体を包摂し、「環境」「社会」インパクトを増進する未来のスポーツのあり方へ。

私たちがほしい世界とスポーツ

1. 自分の心の中にある偏見を乗り越える

- ・私の経験：ベトナムでの国連ボランティア活動（Habitat for Humanity）：
貧困が原因で家がない人々と、ともに家を建てる。
自分の中にあった壁を相互に乗り越え、深い信頼関係を築いた。
- ・現在の世界：ソーシャル・メディアによる「分断」（エコチェンバー）、異なる立場の人への想像力の欠如、偏見があることに気がつかない。
- ・私たちがほしい世界：誰もが持っている先入観や偏見を認識し、誰かが排除されていないか、一度立ち止まって考える。互いに理解しようとするところ、SDGsを実現する基礎としての「パートナーシップ」につながる。

スポーツや大会に望むこと：

目に見えない差別など、社会にある課題を「自分ごと」として捉えられる大会。光が当たらない人々への想像力を大切にしながら、さまざまな市民を巻き込んだ大会に。



私たちがほしい世界とスポーツ

2. ジェンダーの意識改革

・私の経験：企業SDGs広告に関わるプロジェクトで、ジェンダー平等、女性・女兒の貧困、健康、環境の観点から「女性の生理」を扱う活動を推進していたが、最後のフェーズになって中止。

・現在の世界：「都合の悪いことは無視する」。女性が男性よりも不利になることが繰り返される構造。意識改革はまだまだ。「女性だから」採用する？

▼

・私たちがほしい世界：ステレオタイプやジェンダーによる偏見や差別がない世界。あえてジェンダーを取り上げなくてもよい世界。

▶ **スポーツや大会に望むこと**：LGBTQを含むジェンダーに関する無意識の思い込みについて、互いに「心理的安全性」をもって語り合うことで、社会が前進する大会。ジェンダーを理由に判断されたり、いやな気持ちにならない大会。



私たちがほしい世界とスポーツ

3. 一人ひとりが、世界の中で自分の役割を見つける

- ・私の経験：SDGsに対する冷やかし。「SDGsってどうなの?」。「今の流行り」。「知っているけど共感しない」。就活面接：「見せている部分」と違う。
- ・現在の世界：企業：「SDGsウォッシュ」、行政：「持続しないやり方」、個人：「自分の力では達成できない」→システムがデザインできていない。
- ・私たちがほしい世界：2030年まではSDGsがめざす世界をつくっていきたい。一人ひとりが自分の役割（使命、テーマのようなもの）を見つける。それぞれの人がアプローチできる世界。

スポーツや大会に望むこと：市民が自らの使命を見つけ挑戦する力を、アスリートの挑戦を通じてエンパワーし、自分が「世界に貢献できる」実感が持てる大会。スポーツを通じてサステナビリティとの出会い＝「原点」を。





ありがとうございました
#ARIGATO

PORTRAYAL GUIDELINES

GENDER-EQUAL, FAIR AND INCLUSIVE
REPRESENTATION IN SPORT



持続可能性評価プロジェクトの挑戦（開催前時点）

1. 大会に関する理解枠組みの転換＝「リフレーミング」をどう反映するか。

サステナビリティに「配慮する」大会をめざすだけでなく、
いかに大会という機会を利用して、社会のサステナビリティの実現につなげるか

2. 大会の各段階と短期・長期のインパクトをどのように測るか。

無観客開催、規模大幅縮小、再延期、あるいは中止という選択肢がある中で、
大会前（pre-games）、大会（games）、大会後（post-games）の影響をどのように理解するか。

3. SDGsにもとづく大会の評価をどのように設計するか。

SDGsの視点から、あるべき大会／大会後のすがたについて、どのように社会的議論を喚起していくか。
データが入手困難なものも多い中で、どのように客観的な指標を設計できるか。
データに表れづらい人々の経験にどのようにアプローチするか。